

生死の狭間に

愛媛県 宇都宮 政 壽

大隊長と話をしていた通訳と二人のソ連兵が寄って来て「ついて来い」と連行される。途中、通訳が私の耳元に小声で「どこかで拾ったということだけで通しなさい。後は私に任せなさい」。この助言で気が楽になり、落ちつくことができた。

昭和二十(一九四五)年九月十一日、收容されていた新京医科大学校舎を出て、どこへ行くかも知られ

ソ連軍本部には大勢の将校と兵がいて、爆発騒ぎの故か、物々しい雰囲気であった。

ず新京(長春)駅から貨物列車に乗車、出発する。この時の編成で指揮班に編入され、将校行李（リッパ）の管理運搬と炊事係。黒河の野営では、連日の冷たい秋雨と荒涼たる風景に先が思いやられた。二十八日、やっと出発し乗船。船中「神も仏も頼むに足らず」の思いに駆られて、お守りを黒龍江の流れに放り込む。

取り調べには「黒河の棧橋近くの路上で拾った」で押し通して釈放されたが、一つ間違えば銃殺もの。命拾いできたのは、彼を信頼して割合平静であったことと、彼がソ連軍将校を説得してくれたお陰であって、今もその時の感謝の気持ちをは忘れてはいないが、以来五十六年、過去の思い出が曖昧になり、これを書きながら、彼の名前がどうしても出てこないのが残念至極。鉄棒が戦車攻撃の兵器だったとは、知らぬこととはいえ、大勢の犠牲者を出しかねないところであった。

ブラゴエに上陸、ここで野営することになり、夕食用の飯盒を、工兵隊から借りていた行李運搬用の鉄棒に吊るして火に掛け、同僚の井上二等兵に火の番をさせて、私は全員の水筒を持って川へ水を汲みに行き、帰營してビツクリ。鉄棒が爆発して、井上の胸に鉄片が突き刺さっていた。

将校たちは責任回避か、連行される時に「頑張れ」の声もなければ、釈放された時にも「ご苦労」の声も

かけられず、冷たいものであった。通訳の彼とは出来の違った、兵を思いやることのない将校に抜き難い不信感を抱くことになった。

彼は、白系ロシア人と朝鮮人を両親に持ち、日本語、朝鮮語、満語、ロシア語に堪能で、ソ連軍本部に最も信頼されている通訳であるという。出発に際し、彼は残ると聞き、礼を言わねばとソ連軍本部やあちこち探したが逢えず、心残りであった。

十月四日、ウランウデ六地区六收容所に入り、製材工場班に編入。非能率、不経済な工場で、日本の鋼鉄製の薄い帯鋸と違った、ゴツイ鉄板でできた四枚を組み合わせたもので、ガッシ、ガッシと上下に動かして切る。原木の一割もが鋸屑になるのではと思える程のものが地下室に落ちてくる。これを二人の兵で、地上に小山のように落っている上に、足を取られながら運び上げる。重い籠を空けて戻れば次の籠がいっぱいになっていて、休む暇がない。昼食時に休めるだけで、終業時間が近づく頃には足が動かなくなり、ぶっ倒れそうになる。

また、貨物列車が入れば製品の積み込み作業。監督に「早く早く」と尻を叩かれながら一日中やると肩が赤く腫れ上がり、中には皮が破れてシャツに血を滲ませた兵もいた。このような激務を必死にやってもノルマ未達が続ぎ、食事は質量ともに悪くなり、栄養失調者が続出した。

翌二十一年の春ごろの朝、隣に起居している東海林一等兵が起きてこない。覗いて見ると冷たくなっていた。彼は最後の根こそぎ動員で二度目の応召とか、小柄で気の弱そうな兵であったが、当時、栄養失調で弱っていた。前日、どんな理由か下士官たちに殴られていたのと重なり合って、死期を早めたのかもしれない。彼は新京に残した妻の安否を気遣い苦しんでいた。随分と心残りであったろうが、眠るように安らかな死に顔が救いであった。ソ連兵が早速に運び出したが、どこにどのように埋葬されたか、何の説明もなく、知ることができなかった。

二十二年九月三十日、アクチブの連中と衝突したのが原因か、第三十地区ユウレユラク收容所に転属し

た。

ここで屠殺工場の労務に行った時は、首を切り落とし、後足を吊り上げた牛の胴体を押しに行く作業。上の方に若い女性たちがいて、歌など口ずさみながら、楽しそうに皮を剥ぐ準備作業をしている。血がポタポタ落ちるので用心して下ばかり見て押ししていたが、女性の声に何気なく見上げると、下着をはいていない女性が眼に入った。アレッと思った途端、日本語で「助平」の大声が落ちて来てびっくり。私も咄嗟にこれに応えて大声で「オーチンハラショ」と言ったら、ニコニコ笑いながらキスを投げってきた。遊びではあろうが、天真爛漫というか、底抜けに明るい女性であった。

日時が定かでないが、夕刻、突然に出発命令が出る。列車に乗車する際、ソ連兵が口々に「東京ダモイ」「東京ダモイ」と言う。列車も東に向かって走り出したので、大喜びで寝に就く。翌朝早く起きた兵の「西に向かって走っている」という声に皆が騒然となり、大騒ぎを始めたところ、パパーンの銃声とともに

急停車、扉が開けられ、自動小銃を構えた数人の兵を連れた将校が「騒いだ兵は降りて来い」。大変な剣幕に今までの元気はどこへやら、皆シュンとなる。将校が「今度騒いだら全員射殺する」と威嚇して引き揚げたのでホッとす。

朝食のパン受領の際に見ると、各車両の屋根の上に自動小銃を抱いた兵が、寒空にも平気な顔で座っているのには驚いた。極悪人押送の囚人列車じゃあるまいに、この嚴重な警戒振りは異常で、どんな所へ連れて行かれるのか不安であった。

十月二十五日、着いた所がクズバス炭鉱地帯のキンロスカ五二五―二収容所であった。入所直後、念願であった階級呼称が二年ぶりに撤廃された。

班長に指名されて、まず困ったのがロシア語であった。ロシア語など全然覚える気がなかったので、話などできるはずがない。初めて入坑した日、監督が「すべての指示を班長にする。その責任もすべて班長にとってもらう」という意味の話だったようだが、さっぱりわからなかった。班員の中に少々話せる兵がい

て、彼に通訳兼先生になってもらう。作業に必要なロシア語だけは早く覚えなないと、どんな間違いを起こすかもしれないのだ。

二十三年正月過ぎの午前零時からの作業の折、昇降機から出たところに監督が待っていて「坑木を一本ずつ持ってきて来い」と、担当の坑とは全然違う坑に案内されて行かれ「ここで皆は待っている、宇都宮はついて来い」。梯子を相当昇って横坑に入る。先の方に裂けたり折れた坑木が見える。「あれを新しい坑木に取り替えろ」、誰が見ても危険な作業である。「できない」「やれ」を繰り返しながら戻り、班員に作業の内容について説明。全員が「ノー」。

監督「やってもみないで、できないとはどういうことだ」、班員「落盤が予想される所では作業はできない」の押し問答。板挟みになった私は、ちょっとした隙に梯子に取りつき地上に出る。探照灯が届いていないのと人影がないのを確認して寝転び、満天の星を眺めながら、さてと考へてもよい知恵が浮かばない。坑の兵も気になり、寒さにも堪えられず、十五分か二十

分で坑に戻る。

カンカンになっていた監督が「どこへ行っていた」「地上へ出て歩き回っていた」「馬鹿が、警戒兵に見つかって死ねば射殺されていたぞ」「石炭の下敷きになって死ぬより、一発の弾丸で死ぬ方が楽と思った」。思いもしなかったでたらめな嘘がスラスラと出た。暫くして監督が「ヨシッ、坑木だけは横坑に運び上げろ。終わったら、いつもの坑で石炭の貨車積みをしろ」。

この梯子が、ソ連人の体格に合わせて作られているので、重い坑木を抱えて昇るのは難行苦行。弱っている兵、小さい兵に、小さい坑木を順に持たせて昇る。「落とすなよ、落としたら下から昇る者全員が転落するんだぞ」。それぞれが助け合い、励まし合って、事故もなく運び上げることができたのは幸いであった。

一月一日か二日、監視を兼ねてか、やって来て一緒に作業をするソ連人がいた。

彼が来たその日、下痢に悩む兵を見て「明日、良い薬を持ってきてやる」。翌日持ってきた薬は、何と十

粒ほどのニンニクであった。私が骨膜炎になりかけた時、切開し膿を取る時も、奥歯の抜歯も麻酔薬なしであったが、一般のソ連人にも医薬品が手に入らないことを知った。

三月頃だったか、石炭ではなく石ばかりが出る。監督が「貨車に八〇%程石を積み、その上に石が見えないように石炭を積み込め」。ごまかす作業に大童な時、ブラブラと近づいて来るカンテラを見た監督が慌てふためき「宇都宮、あれをとめろ」「なぜだ」「ガスと石の検査員だ」。二、三人で手相でも見てやるかと話していたら「宇都宮、早く遠くへ行け」必死の様子に仕方がない。近づいて見ると可愛い娘さん、ホッとして手振りを交えて話しかけ「変わった所を見せてくれ」。断られるかと思つたが、アッサリと氷の張り詰めた廃坑や落盤事故の坑などに案内、説明（ほとんどわからず）してくれた。「モスクワから徴用で連れてこられた。五、六年は帰れないだろう」などの話を聞きながら戻る。

一段落してか、休んでいる監督や兵らがニヤニヤし

ながら迎え、兵の一人が「班長、どこまで行きましたか」「廃坑など」「そうじゃなくて、唇か乳か股までか」「馬鹿言え、そんなことをしたら営倉行きだぞ」「誰も来ない所へ案内したのは、彼女にその気があつたからですよ、惜しいことをしましたな」。栄養失調で性欲のカケラもない癖に、助平な妄想を話し合っていたものだ。

七月七日、帰国のため同所を出発。二十一日、ナホトカ着。八月十一日、永徳丸に乗船。十四日、舞鶴に入港、復員した。

「運は天にあり、命は天にあり」の言葉がある。運がすべてとは思わないが、シベリアでは、幸運に恵まれた者と不運な者とは、生死を分ける。三年の間に体験し、見聞きした事件、事故は多いが、私自身に振りかかった生死を分けかねない事件、事故の折に、住き人たちに出会えたのは運であり、幸運であった。記憶が曖昧になつたけれど、おぼろげでも忘れ得ぬ人々がいる。

ブラゴエでの通訳。暗号関係で政治部将校の取り調

べを受けた時の通訳が、ハルビンで日本人と結婚していた日本びいきの美しい女性。骨膜炎になりかかった折、切開と抜歯で治癒してくれた日本軍軍医。階級呼称撤廃の秘かな根回しが洩れ、首謀者と目されて、下士官たちの私刑を受ける寸前に抑えてくれた、体中に入れ墨をしていた青木上等兵。屠殺工場の稚氣溢れる女性、気立ての良い石検査員は、疲れ荒んだ心を和ませてくれた。

坑内作業で、横坑に溜まった石炭下ろしの折、油断から大量の石炭に巻き込まれて堅坑に転落、生き埋めになりかねない時、迅速に救出してくれたことや、作業命令拒否にも処罰を見送ってくれた温厚な監督。

病に倒れ、日本軍軍医の強い説得にも頑として休養の承知をせず、憎たらしいと思った女医が、当時、日本へ送還の人選が進められていたのであろう、そこへ申告か意見具申をしてくれたので帰国者の一員になり得たものと推測できた。

命長らえて今あるのも、こうした人々の階級を越え、民族の垣根を越えた人道的な好意によるもので、

忘れ得ぬ思い出として胸に刻み込んでおきたい。

また、手元に今も大事にしている三通の電報に、三葉のハガキと引揚証明書がある。これらは、私の人生を左右しかねなかったほど何物にも替えがたいものなので、ここに書き残しておきたい。

二十年四月、父から「結婚の話がある、一度帰れ」の督促に、五月早々、兵事部に帰郷届けを提出。十四日、北安市を出発するが、ハルビンの駅で「関釜連絡船は軍が徴用、民間人は乗船できない」と知らされた。仕方がないが、このまま引き返すのも業っ腹、旅費と餞別で懐は温かい、ままよ、旅の恥はかき捨てと二日間遊び呆けて、十六日朝出勤。総務部長が「オオッ、いいところへ帰った、お父さんから明日入隊の電報だ」。渡された電報には「一七ヒ一三ジ、キタソング六二八ブタイニユケ、ケンコウライノル」であった。

手元にある電報は、兵事員から私あての「コウヨウアリ」云々、私から父に「一七ヒタツ」云々と、兵事員から父に「マニアツタ」云々の三通である。

出生地

関釜連絡船に乗船できないことを知らず、ハルビン駅を通過して釜山に向かっていたら、当然入隊に間に合わず、憲兵隊に追われる身になり、私の人生は奈落の底に転落していたかもしれないのである。

三葉のハガキの二通は、ウラジオストック郵便局気付、一通はモスクワ市の郵便局気付のもの。

「こんなハガキ、着くものか」と書かない兵もいたが、私は書いて出した。

父母、祖父母は、わが子、わが孫が、終戦から一年

有余生死不明で、心配と不安の明け暮れのところに、

生きている証しのハガキに驚喜したことであつたらう。ソ連のたった一つの善行であつた。

引揚証明書は、シベリアに三年間、強制抑留されて労働に従事した事実を、わが子らに残す証しである。

【執筆者の紹介】

生年月日

大正九年十月八日

父、宇都宮彌重春。母、わさゑの

長男として出生

愛媛県東宇和郡石城村、住所表示

変更により現在は東宇和郡宇和町

大字郷内

昭和十年四月

県立宇和農業学校入学

十二年八月

地区の武道大会に柔道選手として

猛練習中に肋膜炎を併発し、入院

二年半の療養生活のため中退

十五年二月

石城村役場に採用

十五年七月

病弱のため徴兵検査、丙種合格

十六年四月

中野高等無線学校入学

十六年九月末

同校繰り上げ卒業

十六年十月

滿州国治安部警務司に採用。通化

省内にて無線通信士と暗号手として勤務（二年十カ月）。依願退職

北安市の国策会社北満車両（株）

十九年八月

に入社

二十年五月

召集令状を受け、北孫兵六二八部隊に入隊

二十年五月

召集令状を受け、北孫兵六二八部隊に入隊

終戦後、新京、黒河を経てブラゴエに上陸、入ッしてから三年間、シベリアの各地で強制労働に従事する。傍ら、逆境の中でのヒューマニズムを記録した手記を寄せて下さった。

もともと若い時から無理をして柔道選手をしたり、南国の愛媛から北滿の気候風土の違う異境へ就職したり、青春時代の若気満々の氏を偲ばせる。題名の「生死の狭間」をくぐって帰国したのは昭和二十三年八月十四日、舞鶴港着。永徳丸であった。この船は、今の紹介を書いている山本と同じであった。因縁とは恐ろしいものである。

帰国後は地元の石城農協に就職。三十年六月から愛媛県共済農業協同組合連合会に転職。五十一年三月、定年退職となる。その間、昭和四十七年には全国から選ばれて、海外協同組合保険研修団員として二十四日間の研修旅行に参加、カナダ、アメリカ、イギリス、イタリア、スイス、フランス、西ドイツと大変忙しい祝祭であった、と。

県立高校のPTAの副会長を二期、地裁・簡裁の調

停委員、司法委員などを歴任、社会のためにも貢献されてこられ、平成九年四月、財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部に入会され、十一年四月、理事に、十三年六月、総会で副支部長に選任される。高知県の慰霊碑の落成式に、愛媛とモンゴルの親善協会の設立に、愛媛護国神社の春秋の大祭には(財)全抑協愛媛支部を代表して大祭委員としての奉仕、平成十三年八月二十日、松山市で開催した「戦争体験を語り継ぐ集い」に際して実行委員として、参加者の動員のため、ズバ抜けてたくさんの方の友人、知人を集めて下さった。寡黙で謹厳実直な氏の性格は、全役員の尊敬の的でございます。氏の益々の御健勝を祈ります。

(愛媛県 山本 繁夫)